

先日、紅葉さなかの京都に行く機会があった。久しぶりの京都の紅葉は素晴らしかった。ただ、京都の街の混雑ぶりには閉口した。自分もその混雑を起している一人であるので文句を言える立場ではないが、街のどこにいつても人の波である。駅周辺のお土産店ではレジでの支払いをするため長い行列ができていた。ホテルの朝食会場でも席を探すのが大変な状況だ。

新型コロナウイルスの感染で閉じ込められていた人たちが、一斉に旅行に出てきている。旅行者の方々にとってはこれまで苦しめられてきた分を取り戻す絶好の機会となっている。世の中ではコロナ禍への反動で消費が拡大することをリベンジ消費という。観光だけでなく、外食産業でもそうした動きが見られる。滞在先の京都のホテルで見たテ

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

## 論壇

### 需要のリバウンド 来年期待

レビの番組で、京都市内のタクシー利用が増えているのに、運転手が十分に確保できずタクシーが不足気味であるという番組をやっていた。私が乗車したタクシーの運転手によると、コロナ禍で仕事が減って、高齢の運転手などが仕事を離れ、中には引退をってしまった人もいる。コロナ禍からの回復で仕事が増えている。景気の回復もインフレも人手不足も、要するにコロナ禍で大きく落ち込んだ需要のリバウンド(反動)で起きた需要の増加で起きたことだ。コロナ禍での需要の落ち込みは戦後最大規模であったので、その分リバウンドも大きい。さて、こうした日米の類似は、日本の景気の今後の動きにどのような

でも、そうした人たちが戻ってこない。深刻な運転手不足であるという。京都のこうした光景を見て、日本で起きていることは基本的に米国などと変わらないと感じた。コロナ禍からの反動で、米国では依然として景気は好調である。労働力が戻ってこないで、人手不足が深刻で、賃金や物価が大幅に上昇する事態が続

示唆を与えるのだろうか。そこで鍵となるのは、日本におけるリバウンドの大きさとタイミングである。日本でもコロナ禍で需要は大きく落ち込んだので、リバウンドはそれなりに大きいはずだ。そして、米欧に比べてコロナ感染に敏感に反応した日本では、リバウンドの時期が少し後にずれた。日本では、来年にリバウンドの影響が強くなるのが期待さ

れる。IMF(国際通貨基金)の最新10月の予測でも、来年の成長予想は米国で1.0%、欧州で0.5%であるのに、日本は1.6%となっている。つまり来年は先進国の中で日本の経済成長率が最も高くなると予想されているのだ。

予想が当たるかどうかはさておき、来年の日本経済は需要がさらに拡大し、人手不足も深刻になってくるだろう。人手不足は企業にとつては困ったことだろうが、賃金が上昇していくという意味では多くの国民にとつてありがたい事ではある。

ただ、こうした景気を牽引するリバウンドは永遠には続かない。来年の米欧の経済成長率が大きく低下しているように、日本もどこかでリバウンドの息切れとなるだろう。当面、リバウンドの恩恵を期待しながら、その先の景気後退に備える必要がある。

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。